日本大学大学院総合社会情報研究科紀要　No.14, 233-242 (2013)

グレアム・グリーン『叔母との旅』
――物語における植物を用いた自然描写の役割――

山村　結花
日本大学大学院総合社会情報研究科

Graham Greene: *Travel With My Aunt*
―Roles of the depiction of the natural beauty of the plants in the story―

YAMAMURA Yuka
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Travel With My Aunt (1969) was written by Graham Greene (1904-1991) who was called a Catholic novelist, at the age of sixty five. Although this story which Greene regarded as "Novel" has been interpreted as a work full of pathos and humor so far, in fact, there are many dark sides of the characters in this story, such as injustice, evil, cruelty, and brutality.

Interestingly, in the same scenes which those dark sides of human being are depicted, Henry Pulling who is the narrator and the main character of this story feels comfortable with plants even in precarious circumstance, as well as he enjoys the natural environment where he is surrounded.

Therefore, in this paper, with focusing on the depiction of the natural beauty of the plants, that Henry enjoys and feels in the places where he also experiences the darkness of human being, I try to clarify how it relates to the negative images of characters in the story.

1.はじめに

『叔母との旅』（*Travel With My Aunt*, 1969）はグレアム・グリーン（Graham Greene, 1904-1991）が六十五歳の時に出版した長編小説であり、彼はこの作品を「ノヴェル」と位置づけている[1]。この物語の邦訳のあとがきには､「常識と非常識の対照がかもし出すユーモアとペーソスは、この作品に終始ながれている一つのアンダートーンだ」[2]と記されている。しかし、物語全体を通して、登場人物たちの行為には「不正」、「悪」、「冷酷さ」、「残忍性」が描かれており、この物語が単にユーモアとペーソスの作品とは言い難い部分が数多く見られるのである。

また、興味深いことに、この物語では人間の「闇」が描かれている場面が数多く存在する一方で、一人称の語り手であるヘンリー・プリング（Henry Pulling）がダリア栽培を趣味とするだけでなく、彼の人生の転機とともにその土地に生息する植物と触れ合うことで彼自身が自然を満喫し、心地良さを感じる場面も多数見られる。

そこで、本稿は、語り手ヘンリーの視点により描かれている植物（自然）が、物語における「不正」、「悪」、「冷酷さ」、「残忍性」という負のイメージに対し、どのような働きをしているのかその関係性を検証することを目的とする。

2.プロット

物語の主人公であるヘンリー・プリングは母の葬儀において、叔母であるオーガスタ（Augusta）と五十年ぶりに再会する。七十五歳の叔母は、自分よりもずいぶん若い黒人の恋人ワーズワス（Wordsworth）（オーガスタがそう呼ぶ）に身の回りの世話をさせ、今もなお自由奔放に生きている。彼女は、享楽的で陽気な性格の持ち主であるとともに、滑稽さとしたたかさを秘めた豪快な一面をもっている。オーガスタはヘンリーに亡くなった彼女の姉が彼の実母ではなく、彼は四十年前に他界したヘンリーの父が別の

女性に産ませた子供であるという衝撃的な事実を明かす。数日後、ヘンリーはオーガスタに誘われブライトンを訪れる。二人はオーガスタの古くからの知人に紅茶占いをしてもらうと、その知人は何か危険な旅が待ち構えていることを彼ら二人に告げる。しかし、ヘンリーは自分の平穏な暮らしから危険な未来など全く想像がつかなかった。

ブライトンから帰宅したヘンリーは、早速、オーガスタからイスタンブールへの旅に同行するように誘われる。彼女の旅の計画はヒースロー空港から飛行機でパリに向かい、そこからはオリエント急行に乗りイスタンブールへ向かうという、ヘンリーにとってはいささか奇妙なものであった。実は、オーガスタは札束をぎっしりと敷き詰めたカバンを持参するこの旅で、昔の恋人に再会する計画だったのである。しかし、オリエント急行でイスタンブールへ着いたものの、彼女は昔の恋人に再会できないばかりか、ヘンリーと滞在する宿泊先に訪れた憲兵将校によって国外退去を命じられる。その時、オーガスタは蝋燭に金魂を隠し持っていたにもかかわらず、幸いにも金魂は憲兵将校の目を免れたのである。

帰宅したヘンリーは父が愛読していた『ロブ・ロイ』の中に挟まれていた、水着を着て微笑みを浮かべる若かりし頃のオーガスタの写真を偶然見つける。母が実母ではなかったこと、また、その写真を見つけたことで、ヘンリーは次第に父を懐かしむようになり、オーガスタを誘ってブーローニュに眠る父の墓参りをする。その後、ヘンリーはイギリスに帰国するが、オーガスタはパリに向かい、彼女からの連絡は途絶えてしまう。しばらくして、国際警察がヘンリーの元に訪れ、オーガスタの部屋を捜査したいと申し出る。彼女は戦犯として追われている者と関わりがあるのではないかと疑われていたのである。

クリスマスが過ぎ、六ヶ月が経ったある日、ヘンリーはオーガスタからの手紙を受け取る。そこには彼女の部屋と持ち物を整理し、今彼女が滞在するブエノスアイレスに来て欲しいと記され、彼の旅券はオーガスタによってすでに用意されていた。

ブエノスアイレスに着いたヘンリーは、ホテルでオーガスタの置き手紙を受け取り、パラグアイに行くようにと支持を受ける。彼女の指示通り、密輸が横行する常夏のパラグアイ南部のアスンシオンに着いたヘンリーは、迎えに来たワーズワスに連れられ、彼女の住む豪邸に到着する。オーガスタの若い恋人であったワーズワスは今や彼女に捨てられそうになっており、彼女はこの家で、ナチスの戦犯として警察から追われている八十歳を過ぎた昔の恋人ヴィスコンティ（Visconti）との再会を目論んでいた。オーガスタに一緒に住むように勧められたヘンリーは、彼女が自分の実母であることに気づく。オーガスタのおかげでようやく解放されたヴィスコンティは彼女との結婚を決意し、ヘンリーに貿易会社の経営に加わるように勧める。そして、盛大なパーティが開かれた夜、ヘンリーは庭に出て木々の中を歩く中、ワーズワスの死体と彼のナイフを偶然見つける。

平穏なロンドンの暮らしとは対照的な危険と波乱に富んだ暮らしを経験したヘンリーはパラグアイへの移住を決意し、オーガスタとヴィスコンティとともに暮らし、彼らの貿易会社経営を手伝い、この地に暮らす税関の男の十六歳の娘と結婚する。[3]

3.先行研究

3.1. 物語における正・負のイメージ

宮本靖介は次のように言う。

> 今までのヘンリーの生き方が正（プラス）であったとすれば、叔母とヴィスコンティが送ってきた人生は麻薬、密輸、詐欺の集積であって負（マイナス）の烙印にしか値しないはずだが、正と負が逆転してしまい、ヘンリーは負い目を感じて次第に負の正解のほうに傾斜してゆく[4]

宮本は、グリーンがこうした方法をもって価値観を逆転したアウトサイダー的人生に焦点をあてることによって何を示唆しようとしたのか検証している。そこで、宮本は、ピーター・ウルフ（Peter Wolfe）がグリーンの世界の登場人物たちには根なし草的な不安感が常に存在するが、一見喜劇ふうに見えるこの作品において、作者はこの不安感を人生の価値基準として正面から見すえていると言っている[5]ことから、叔母であるオーガスタの言葉にはヘンリーの漫然とした老後生活への安定指向を打ち砕くだけの

確信がみなぎっていたのであると指摘する。[6]　また、長らくグリーンと愛人関係にあったキャサリン・ウォルストン（Catherine Walston）夫人の素顔や奔放な生き方などの一切がオーガスタ叔母の横顔に刻み込まれているようであるとマイクル・シェルデン（Michael Shelden）が述べていること[7]、さらに、グリーンが知り合いだった女医がオーガスタの陽気な性格のモデルと考えられていることを指摘したうえで、オーガスタは疲れを知らず、追い込むこともない、グリーンが願望した理想の女性像だったのかもしれないとも述べている。[8]　つまり、宮本は、物語における負のイメージを正のイメージに逆転させているのはグリーンの願望的女性像であるオーガスタ叔母の自由奔放な個性であると述べているのである。

一方、ハイム・ゴードン（Haim Gordon）は、この物語の主人公オーガスタと、『ブライトン・ロック』（*Brighton Rock*,1938）の主人公ピンキー（Pinkie）と、『イギリスが私を作った』（*England Made Me*,1935）の主人公エリック（Eric）の三人における「悪」を比較検証し、それらに共通点があるとしながら、オーガスタの残忍性と誘惑的な魅力について次のように言及している。

> Aunt Augusta, whose past as a high-class strumpet and a joyful companion of racketeers, felons, and Italian fascists who worked with the Nazis gradually emerges, easily manipulates her bored bachelor son, Henry Pulling, to join her in repeatedly breaking the law.[9]

ゴードンは、高級売春婦として、そして、ゆすりをする人々やナチスに従事したイタリ人ファシストの陽気な連れとしての過去を持つオーガスタ叔母は、次第に身を明かしていき、つまらない独り者の息子ヘンリー・プリングを容易に操り、繰り返し法を犯す彼女の仲間に引き込んでいくと言う。さらに、彼はオーガスタの誘惑的な魅力について次のように指摘している。

> Aunt Augusta is the most seductive of the three; she has molded her spiritual hollowness into a personal charm that assists her in seducing and manipulating people.[10]

彼は、オーガスタが、既述したそれぞれの物語における三人の主人公の中で最も誘惑的であり、彼女は彼女の精神的な空しさを、人々を誘い、そして、操ることの助けとなる彼女自身の魅力として作り上げていると言う。しかし、ゴードンは、物語の終わりにはオーガスタが自分の息子ヘンリーを操り自己利益を得ようとする、言わば、彼女の人間性における負の部分に読者が気づくとして次のようにも指摘している。

> With Aunt Augusta, he is like clay in the hands of a sculptor. Make no mistake, however. Aunt Augusta's seductive and ruthless charm has nothing worthy to offer. As the book ends, one discerns the revolting, maladroit life of a smuggler and lawbreaker that she has molded for her bored son.[11]

ゴードンによれば、ヘンリーはオーガスタとともにいると、まるで、彫刻家の手の中の粘土のようであり、物語の終わりにおいて、読者は彼女が自分の退屈な息子のために作り出した密輸業者と法律違反者の不快で不器用な暮らしを見抜くと言う。

この見解は、オーガスタが奔放で疲れを知ることなく活動的で、人を追い込むことないおおらかな魅力を持ち備えている一方で、他方、残忍で犯罪や悪行の過去を持ち、精神的空しさを自らの誘惑的な魅力として作り上げ、自分の愛するヴィスコンティの手助けをさせながら密輸業者・法律違反者として暮らしていくように自分の息子を操ることで、自己利益を獲得する女性であると言えるとしている。しかも、物語の終わりに読者自身がオーガスタの人間としての負のイメージとなる部分を見抜くのである。

しかし、オーガスタの負のイメージを見抜いてもなお、読者が物語に対して正のイメージを受けるのは、オーガスタ自身の自由奔放な個性がその負なるイメージを逆転させるからであるという理由のみであろうか。他にもこの物語を正のイメージに逆転させるものが作品中に潜んでいるのではないか。なぜ

ならば、オーガスタの自由奔放さは残忍性と不正、すなわち、負のイメージを含めたうえでのものであり、果たしてそうした自由奔放さのみが正のイメージへと完全に逆転させることを可能にするのかという疑問が生じるからである。そこで、物語の語りに何か理由が隠されているのではないかということが浮上してくる。

この物語の語り手はヘンリーである。それゆえ、ヘンリー自身が受ける印象は、読み手に伝わると考えられる。つまり、物語において、ヘンリーが正としての印象を受ける描写は、読み手に正のイメージを伝え、その正のイメージは、オーガスタから放たれるこの物語の負のイメージを逆転させることができるのではないか。あるいは、逆転させることができないまでも、負のイメージが抑制されることで正のイメージが際立つと考えられるのではないかということである。では、ヘンリーが好印象を受ける様子が描かれた場面とはどういった場面であるのか。

彼の趣味がダリア栽培であることから、彼は植物に対して非常に好感を持っていることが容易に推測できる。また、ヘンリーは訪れた先の地において、街の治安が悪く情勢が不安定で腐敗した様子を察しながらも、美しい植物が織り成す自然に好印象を得る様子が描かれている場面が数多く見られる。そこで、次項では、植物や自然が与えるイメージについて考えてみたい。

3.2. 物語における「理想的経験の原型」と「非理想的経験の原型」

リーランド・ライケン（Leland Ryken）は『聖書の文学』「第一章　聖書文学序説」において、聖書が西洋文学における原型の偉大な貯蔵所そのものであり、特に重要なのは文学の全体的な原型的パターンであると述べている。[12]　そして、文学全部を取り上げて、それを図式化すれば、それが＜単一神話[13]＞と呼ばれる一つの複合的語りを形成していることが分かると言及し、その語りがもつ四つの相よりなる周期的構造を、悲劇と喜劇を横軸とし、それぞれを正（＋）と負（－）に、また、ロマンスと反ロマンスを縦軸とし、それぞれを正（＋）と負（－）として記している。さらに、単一神話のイメージは、理想的・非理想的、喜劇的・悲劇的、黙示的・悪意的という二つのグループに分けられるとしている。そして、ノースロップ・フライの批評体系による、「理想的経験の原型」と「非理想的経験の原型」のそれぞれを、人間世界、動物世界、植物世界、無機物世界、水のイメージ群、自然の力などに分類したリストを記している。[14]

このリストによると、「理想的経験の原型」における植物世界には、庭、森、あるいは公園／生命樹／バラが分類され、また、自然の力には、そよ風あるいは嵐／嵐のあとの静けさ／春と夏の季節／太陽／あるいは月や星のより小さな光／光、日の出、昼が分類されている。さらに、ライケンは次のようにも述べている。

> 聖書の原型的な内容は聖書に統一性のみならず、普遍性をも付与している。原型は、人間経験のなかでも万人に共通し、本質的であるものを表現する。ノースロップ・フライの言葉で言えば、「すべての人間に共通する事物のイメージとなっている象徴もあって、それらはしたがって、潜在的には無限である伝達可能な力をもっていることになる」[15]　原型は聖書のものであるばかりでなく、文学自体の基本的な構成要素でもあるので、聖書文学の原型は聖書文学を他の文学に関係づけることを許す。[16]

つまり、ライケンによれば、こうしたイメージは万人に共通するイメージであり、それは文学全体に関係しているというのである。とすれば、『叔母との旅』において、語り手であるヘンリーが好感を持つ植物が「理想的経験の原型」に属すると言えるなら、植物の描写がオーガスタの残忍で冷酷な人物像ならびに悪行による物語における負のイメージを正のイメージに転じることに関係していると言えるのではないか。

そこで、次に、この物語において、ヘンリーの視点により描かれている植物が織り成す自然の描写に着目して見ていきたい。

4.植物を用いた自然の描写

4.1　アルゼンチン領フォルモサにて

物語の終盤を迎える第二部第三章において、ヘンリーの乗った船はアルゼンチン領フォルモサに着く。甲板歩きに飽きたヘンリーは下船し、その街中を歩き始める。この時の街の様子は、ヘンリーの語りにおいて次のように記されている。

> There was a pervading smell of orange petals, but it was the only sweet thing about Formosa. One Long avenue was lined with oranges and trees bearing rose-coloured flowers, which I learnt later to be *lapachos*. . . . little shops selling Coca-Cola: a cinema which advertised an Italian Western: two hairdressers: a garage with one wrecked car: a *cantina*. The only house of more than one storey was the hotel, and the only old and beautiful building in the long avenue proved, as I came closer to it, to be the prison. There were fountains all down the avenue but they didn't play. (p.199)[17]

ヘンリーはこの街の良いところはただ一つ、あたりにはオレンジの花弁の匂いが立ちこめていたことだけであるとし、ラパーチョの木がオレンジやバラ色の花をつけているのを目にしている。しかし、同時に、ヘンリーは華やかさのない街並みも目にしている。平屋でない建物はホテルだけで、その街には娯楽と言えるものがほとんどなく、古色蒼然として美しい建物は刑務所であり、噴水から水は出ていない。このように、この場面における柑橘の香りとラパーチョの花の艶やかさにはこの街のトロピカルな自然環境が、片や、閑散とした街並みには活気や潤いのないこの街の廃れた状態が描かれているのである。つまり、ヘンリーはパラグアイの川岸にあるこの街に上陸して間もなく、この街における柑橘の香りとラパーチョの花が織り成す自然の豊かさだけでなく、経済状況の貧しさも同時に認識しているのである。

ヘンリーはこのフォルモサの街をサウスウッドと比較しながらさらに歩き続ける。

> It was as though I had escaped from an open prison, had been snatched away, provided with a rope ladder and a waiting car, into my aunt's world, the world of the unexpected character and the unforeseen event. (p.200)

ヘンリーは住み慣れたサウスウッドを広々とした牢獄と感じ、そこから逃げ出し、ようやくたどり着いた場所が、情勢が安定しているとは言い難いフォルモサの街であるとしているのである。つまり、到着したばかりのこのフォルモサの街に対し、ヘンリーは危険を察知しながらも、開放感を感じているということである。また、ヘンリーは自分の意思によってではなく、叔母の世界へと救出されて来たかのような感覚にも浸っている。その叔母の世界とは、ヘンリーにとって見当もつかない性質を持つ何が起こるかわからない世界、すなわち、それは彼の想像と期待と不安が膨らむ世界と言え、彼は今、その叔母の世界に自らが入り込んでいると感じ始めているのである。

実は、その日の朝、ヘンリーは船室の寝床にいたとき、彼の父の遺品であるポールグレイブの『抒情詩珠玉集』の中に収められたワーズワスの頌歌（オード）に、彼の父が折り目をつけ、「獄舎」という言葉を含む詩句に二重丸をつけていたことに気づいた。ヘンリーはその街の中を歩きながら、もしかすると、自分の父が「牢獄」と見たものは、彼らの家であり、自分自身と義母が父の看守だったのではないかと考え始める。

> I had been born as a result of what my stepmother would have called an immoral act, an act of darkness. I had begun in immoral freedom. (p.201)

ヘンリーは自分の一生が邪悪な行為と継母が呼んだであろうものの結果として始まったことになるとしながらも、なぜ、自分が獄舎につながれなければならないのだろうと疑問を抱く。そして、彼はこのフォルモサの街にやって来たことで、自らを塞き止めていたしがらみからようやく逃げ出せることができたという開放感を再び抱くのである。

4.2.　パラグアイ南部のアスンシオンにて

第二部第四章において、ヘンリーの乗った船はようやくオーガスタの滞在するパラグアイ南部のアスンシオンに到着する。

> Half-ruined huts stood at the very edge of the cliff and naked children with the pot-bellies of malnutrition stared down on us as the boat passed, moving like an overfed man who picks his slow way home after a heavy meal, giving little belches on the siren. Above the huts, like a medieval castle dominating some wretched village of mud and wattle, stood the great white bastions of Shell. (p.210)

この語りには、物語終盤の舞台となるパラグアイの困窮した情勢と他国との貧富の差が描かれている。また、その小屋の上手にあるシェル石油の白塗りの大きな建物は、この国への外資の参入のみならず、この国と諸外国間を行き来する外国船や飛行機の多さを推測させる。つまり、この語りには、この物語の中で、‘It’s the national industry of Paraguay,’(p.205)と記されているように、パラグアイの国家産業が密輸であったと言われる当時のパラグアイの情勢も間接的に示されているのである。

ようやく下船する手続きが済んだヘンリーは、バンジャマン・コンスタン（Henri-Benjamin Constant de Rebecque）[18]の名をとってつけた通りの角に荷物を置き周りを見渡す。

> A small boy wanted to clean my shoes and another tried to sell me American cigarettes. A long colonnaded street, which sloped uphill in front of me, was full of liquor shops, and old women sat against the wall with baskets of bread and fruit. In spite of the dirt and fumes of old cars the air was sweet with orange blossom. (p.211)

この場面に描かれている金銭を稼ぐことに必死な子供達や、籠に入れたパンや果物を売る老婆たちは、この街の貧しさを表し、さらに、古ぼけた車が立てる埃とガソリンの煙は、街の不衛生さや不快さを表していると言える。しかし、この語りには、ヘンリーがフォルモサに到着したときと同様に、オレンジの花のいい匂いが漂っていることが記されており、この街に対してヘンリーが抱く不快感だけでなく、心地良さも描かれていると言える。

その後、彼は迎えに来たワーズワスとともに古ぼけたタクシーに乗り込み街の中を進んでいく。

> Soldiers were goose-stepping in front of the cathedral, and a very early tank stood on a plinth up on the greensward. The Orange trees were everywhere, some in fruit and some in blossom. (p.211)

大聖堂と兵隊、あおあおとした芝生の上の戦車は、この街における不釣り合いや、違和感という印象を与えている。しかし、ここでもまたオレンジの木はいたるところに見られ、実のなったものもあれば花が咲いているものもあり、オレンジの木と実と花によりこの街のさわやかでのんびりとした美しい自然が描かれている。こうした中、ヘンリーは植物をめぐって再びアスンシオンの街と彼の故郷サウスウッドの街を比較し始める。

> In place of the orange and banana trees, I would have seen neglected rhododendrons and threadbare lawns. (p.212)

ヘンリーはこのアスンシオンの街を「オレンジ」と「バナナ」の木に、また、サウスウッドを「手入れのわるいシャクナゲ」と「すり切れた芝生」に置き換えている。すなわち、こうした植物比較により、彼がアスンシオンの街に対してサウスウッドよりも生き生きとした印象を受けていることが読み取れるのである。

さらに、ヘンリーは荒廃した建物を目にしながら、白い花と青い花を咲かせているジャスミンの茂みを目にする。

> A little crumbling house with corinthian pillars and broken windows was called School of Architecture

on a board which had been split by the seasons, but, however tumbledown the houses, the flowers were everywhere. A bush of jasmine blossomed with white and blue flowers on the same bush. (p.212)

人工による建物がどれだけ荒廃していようとも、ヘンリーにとってはアスンシオンの街が、草花は絶えることなく色付くことで美しい自然に満ち溢れていると映るのである。

4.3.　オーガスタの家にて

ヘンリーは、オーガスタと再会するために彼女の若い恋人であったワーズワスの案内で彼女が住む家に到着する。

It was an enormous house with a great untidy lawn which ended in a dark green fuzz of trees, a small wood of banana, orange, lemon, grapefruit, *lapacho*. (p.212)

その家は途方もなく大きく、うすよごれた広い芝生は、ダーク・グリーンに霞んだ木々、バナナ、オレンジ、レモン、グレープ・フルーツ、ラパーチョなどの小さな森まで続いている。

The iron gates were rusty and padlocked. Worn pineapples were carved on the gateposts, but the gates, draped with barbed wire, had lost their dignity. A millionaire may once have lived there, I thought, but no longer.
Wordsworth led me round the corner of the street and we approached the house from the back through a little door which he locked behind him and through the grove of sweet-smelling trees and bushes. (p.212)

その家の敷地内には、これまでヘンリーがイギリスのサウスウッドを離れ南米の国に到着して以来、彼が心地良さを得た植物のすべてが揃っている一方で、その外観には不釣合いな人工物が存在する。つまり、植物が織り成す美しい自然によって得られる心地良い印象とともに描かれている不釣合いな人工物には、これまで平凡に暮らしてきたヘンリーには想像もつかない、あるいは、今までの彼には不釣り合いと言える今後の物語展開が予示されているのであろう。

ヘンリーがその家の中に入ると、出迎えたオーガスタはヘンリーの頬にキスをする。‘kissing my cheek and leaving on the air a smell of lavender’(p.213)と記されているこの場面で、ヘンリーはオーガスタから放たれたラヴェンダーの残り香に気づいている。その後、オーガスタがワーズワスに準備させたコーヒーをヘンリーとオーガスタが飲もうと腰を下ろしたバナナの木の貧弱な陰の辺りには、オレンジとジャスミンの香りが立ちこめている。

We sat down in the meager shade of a banana tree. The air was sweet with orange and jasmine, and the moon swam palely in the pale blue daylight sky. (p.216)

この場面には、ヘンリーがこれまで心地良い印象を得た植物が織り成す自然の中でオーガスタとともに座っている様子が描かれている。つまり、ヘンリーは、今後の生活に対する不安や疑念を抱き、また、オーガスタのワーズワスに対する命令的な言動に示される彼女の冷たさや傲慢さを目にしてもなお、オーガスタに、オーガスタの家に、そして、オーガスタと過ごす時間に対して、彼が好印象を抱いている様子がこの描写によって際立つのである。

4.4.　ワーズワスの遺体発見現場

オーガスタはワーズワスについてヘンリーに次のように述べる。

‘Staff are easy to come by and much cheaper than Wordsworth with all his CTCs. Oh, I’m sorry for poor Wordsworth,’ she added, ‘but he was only a stop-gap. Everything has been a stop-gap since Mr Visconti and I were separated.’ (p.219)

オーガスタはワーズワスに対し気の毒であると思いながらも、すべてがヴィスコンティと自分が別れて

からの穴埋めだったことを認めている。

> ‘To me his is. I like men who are untouchable. I’ve never wanted a man who needed me, Henry. A need is a claim. I thought that Wordsworth wanted my money and the comfort I gave him at the Crown and Anchor, but there’s not much comfort for anyone here and you saw how he wouldn’t even take a CTC. I’m disappointed in Wordsworth.’ (p.219)

さらに、彼女は自分にとってヴィスコンティは価値があり、無神経な人を好む自分は自分を必要とする男に興味がないとも述べている。しかも、彼女は、必要は要求であるとしたうえで、ワーズワスがお金と慰めが欲しいのであろうと思っていたのだが、彼がチップを受け取ろうとしないことにがっかりした。そして、なぜ自分を呼んだのかと尋ねるヘンリーに対し、彼女は次のように答える。

> ‘You are the only family I have, Henry - and you can be of great use to Mr Visconti.’ (p.220)

彼女はヘンリーが彼女の唯一の親族という理由だけでなく、ヴィスコンティの貿易会社、すなわち、密輸業において、ヘンリーが帳簿を任せられる者であるという理由もあって彼を呼び寄せたのである。これらのオーガスタの言動には、彼女が冷酷で残忍な一面を持ち、自分の息子を自らの目的のために利用する、言わば、自己の利益を重視する一面を持っていることが明確に示されている。

ワーズワスが家を出て行った後、ヴィスコンティとオーガスタは自宅で盛大なパーティを催す。時計を見ると明け方になっていたことに気づいたヘンリーは外に出て歩き始める。

> Sunrise was not far off, the lights had been turned out in the garden, and the flowers seemed to breathe their scent more deeply in the small chill of the dawn. I felt oddly elated to be alive, and I knew in a moment of decision that I would never see Major Charge again, nor the dahlias, the empty urn, the packet of Omo on the doorstep or a letter from Miss Keene. (p.259)

明け方の肌寒さの中に草花はより強く匂いを吐き出していると語るヘンリーは、生きていることに対して妙に嬉しさを覚え、自分の家のあるサウスウッドには決して戻ることはないであろうという決意をかみしめながら、良い匂いのする果樹の森の方向へと進んでいく。しかし、そこで、ヘンリーは、ワーズワスのナイフと彼の死体を発見する。

> I struck a match and before the flame went out I saw the body on the ground and the black face starred with white orange petals, which had been blown from the trees in the small breeze of early morning. (p.260)

果樹の香りの中、早朝のそよ風に散ったオレンジの花弁に包まれる黒い顔をしたワーズワスの死体を目にしたヘンリーは、すぐさまその死をオーガスタに伝える。しかし、彼女はヴィスコンティと踊っていることを理由に、ヘンリーに取り合おうともしない。この時、彼女はすでに雇っていた老人からワーズワスの死を知らされていたのであるが、そこには共犯者のように微笑むヴィスコンティの姿がある。その後も問い詰め続けたヘンリーに対し、オーガスタは男同士の問題として多くを語ろうとはしない。

このように、ワーズワスの死を悲しむこともなければ、まるで、彼が死に至ることをすでに予期していたかのような態度を示すオーガスタに対し、ヘンリーは「悪」、「冷酷さ」、「残忍性」を感じても不思議ではない。しかし、ワーズワスの死に対し悲しみにふける間もなく、ヘンリーは彼らとの生活を始め、十六歳になる税関長の娘との結婚を決める。そして、物語は次の言葉で結末を迎える。

> This is, of course, a considerable difference in our ages, but she is a gentle and obedient child, and often in the warm scented evenings we read Browning together.

God’s in his heaven -
All’s right with the world! (p.262)

自分よりはるかに若いその娘は、やさしくて従順な子供であり、花の快い香りが漂う暖かな宵には、二人してよくブラウニングの詩､｢神そらに知ろしめす――すべて世は事もなし！｣[19]を読むと締めくくられるのである。

ヘンリーは果樹の香りと花びらに包まれたワーズワスの死を目撃したことで、オーガスタの「冷酷さ」や「残忍性」のみならず、ヴィスコンティの「残忍性」や彼らの「悪」も目にした。しかし、こうした語りには、今やヘンリーが、オーガスタとヴィスコンティが営む密輸業、すなわち､「不正」な事業に従事しながら彼らと生活をともにし、その生活の中で「花の快い香りが漂う暖かな宵」を楽しむ様子が記されていることで、ヘンリー自身がすっかり負のイメージの中に溶け込み、現状の生活に対し正のイメージを抱いている彼の姿が描き出されているのである。

5.おわりに

この物語は､一般的に､また先行研究においても、叔母であるオーガスタが破天荒で冒険好き、情にほだされやすい反面、冷酷なところがあるにもかかわらず、ユーモアあふれる彼女の談話から彼女が人間味あふれる人物だと解されることが多い。それだけでなく、彼女の自由奔放な生き方やその叔母に影響されるヘンリーの退屈な人生の一変に着目されがちであると言える。しかし、本稿により、ヘンリーがオーガスタに呼び寄せられた国々の情勢不安や身に迫る危険、ならびに、オーガスタの「冷酷さ」と「残忍性」、さらに、彼女が関わる「悪」を目にしながらも、その地において生息するオレンジ、レモン、バナナ、ジャスミン、ラパーチョという植物が織り成す自然の美しい描写によって、彼自身が人生の喜びや楽しみを得ている様子が読み取れる。つまり、登場人物と物語展開における「不正」､「腐敗」､「悪」､「冷酷さ」､「残忍性」という負のイメージが、こうしたヘンリーの視点による植物を用いた美しい自然の描写によって「抑制」されていると解することができるのである。

物語において、こうした植物を用いた美しい自然を物語の舞台設定の主要素として取り込み、それらに物語における「イメージの強調」としての役割ではなく「イメージの抑制」としての役割を担わせ、物語のユーモアやペーソスを維持しながら正のイメージを際立たせるというその方法は、グリーン特有の物語技法であると言える。

正と負の両方のイメージを共存させたまま、負のイメージを抑制することによって、正のイメージがあたかも負のイメージから転換されたように見せるこうした方法は、これまで注目されることのなかったグリーン文学の魅力の要素と言えるであろう。

＜使用テキスト＞

Greene. Graham, *Travel With My Aunt*, London: Vintage, 1999.
グレアム・グリーン著、小倉多加志訳、グレアム・グリーン全集 22『叔母との旅』､早川書房､1981 年。

---

[1] グレアム・グリーン著、小倉多加志訳、グレアム・グリーン全集 22『叔母との旅』、早川書房、1981 年、p.283 参照。
[2] 同上、p.285。
[3] 山形和美編集・監修「21.『叔母との旅』[あらすじ]」『グレアム・グリーン文学事典』、彩流社、2004 年、pp.153-154 参照。
[4] 宮本靖介著「『叔母との旅』――人生軌跡のひとつの集約――」『グレアム・グリーンの小説――宗教と政治のはざまの文学――』、音羽書房鶴見書店、2004 年、pp.156-157。
[5] 同上、p.158。
[6] 宮本靖介著『グレアム・グリーンの小説――宗教と政治のはざまの文学――』、p.158。
[7] 同上、p.158。
[8] 同上、pp.160-161。
[9] Haim Gordon, *FIGHTING EVIL Unsung Heroes in the Novels of Graham Greene*. Westport: GREENWOOD PRESS, 1997, p.11.
[10] *ibid*., p.11.
[11] *ibid*., pp.11-12.
[12] リーランド・ライケン著、山形和美監訳『聖書の文学』、すぐ書房、1990 年、p.28。
[13] 同上、p.28。単一神話 monomyth　文学の全体像を単一の円環パターンのなかに取り組む一般化された、

均質の語り。
[14] 同上、pp.29-31。
[15] 同上、p.32。
[16] 同上、p.32。
[17] 本論考における『叔母との旅』からの引用は Greene. Graham, *Travel With My Aunt*, London: Vintage, 1999 によるものであり、括弧()内にページ数を記す。
[18] 1767~1830。フランスの作家、政治家。スタール婦人とともにナポレオンの政策を批判。自伝的小説「アドルフ」は代表作で近代心理小説の先駆とされる。「コンスタン」「デジタル大辞泉の解説」kotobank.jp. （株）朝日新聞社／（株）VOYAGE GROUP. 19 December 2013. <http://kotobank.jp/word/%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%B3?dic=daijisen&oid=06964300>.
[19] グレアム・グリーン著、小倉多加志訳、グレアム・グリーン全集 22『叔母との旅』、p.281。

(Received:December 20,2013)
(Issued in internet Edition:February 7,2014)